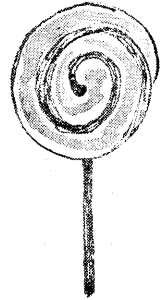


私の保育観



荒牧 富士子

三年前の初秋、私は東ドイツの町のデパートで記念にと思い、ドイツの子どもの写真のついでに数枚の絵葉書を買いました。

そして帰京してからある日のこと短大の保育科のS助教授にこれを見せた。「これは東ドイツで買って来た絵葉書なのよ、白黒だけどよい写真でしょ？」といいながら……。するとS助教授は黙って見ておられたが感にたえないように、「ウーン、人間がいる……という感じね」と一言いわれたのである。

この絵葉書の写真のバックは自然の野である。それは造られた公園でも、立派な庭園でも、人工的なライトの光るスタジオでもない。雑草のおい茂る太陽の光の燦々きらきらとふりそそぐ野っ原である。子どもたちは町のなかにいるドイツの子どもたちと同じように、飾り気のない服装をし、喜々として花を眺めたり、乳母車に

玩具の熊の子をのせて遊んだりしている、ただそれだけである。私はこの絵葉書をもう一度見なおして、人間がいる……という感じね、といわれたS助教授のことばをもう一度かみしめて考えてみた。私たちの園でも教師たちが日々関わりをもっている子どもたちの毎日の生活を、人間らしく、人間の子どもらしく、子どもが子どもとしての生活を見いだすような園にしていきたい、そのことによって彼らの生活を充実したものにしてやりたい、というのが日々の課題でもあったが、改めてこの絵葉書に対するS助教授の発言は、はからずも私の保育の場でお話してこのことを考えるよいきっかけともなった。

私たちの園はもとは静かな住宅街のなかに位置し、園の前の通りも片側通行で車は一方からしか走って来なかった。それが両側

に車が右往左往しだし、信号なしでは渡れない状態になり、ビルが周りに次々と建ち、青空はしだいにその視野をせばめられて来ている。子どもたちの住居はほとんど庭のない狭いアパートやマンション、それでなければ狭い庭と日照権を奪われた店の二階、またよい庭と広い家に住んでいる子どもたちは、大人本位に飾られた人工的に造られた生活をしているものが多い。たとえ充ちた生活をしていても、高級な玩具を持っている子どもがあつたとしても、子どもがもっとも求めているものがあまり本気で考えられていない。私たちの園の子どもたちは、このようにして不自然な環境のなかに毎日を生きているのが大部分である。そこで私の園では、まず子どもたちにくつついてまわっている、母親やその家庭をも含めての価値感のようなものを変えていかなければならない。今まで子どもたちに影響を与えていた不自然なものの影響から抜け出させてやるのが、大きな役目なのである。大げさにいえば、外側に人工的にぬられているものがあればそれを洗いとって、もう一度子どもとしての人間に返すことなのである。

私たちの園の保育のなかでは、子どもたちに神を仰ぐ心情を養うことを大切な目標としているが、子どもを子どもらしくということのなかに、神に近づかせるということによって子どもとしての姿があらわれてくるのではないかということを書いて保育とし

ている。現代は神を知るにはあまりにも神と人間との間に余計なものが入りすぎている。子どもたちに天地を創造した神を知らせ、その愛の中にあることを知らせるといっても、神の創造されたものに直接接触して、その神秘さ、偉大さ、計画や現象や仕組みなどを知ることができないようになって来ている。「み空の色のみずあさぎ」と昔の詩人が忘れた草をうたったが、その「み空の色」を子どもたちの瞳にうつしてやるのがむずかしくなり、それによって神を見ることがむずかしくなって来ているのではないだろうか。風の音も、雷の音も、雨の音も、そして飛行機の爆音や、車の音が、それらの自然の音と異なった感じを持つ、などということもアルミサッシュの戸の密室のなかで生活している子どもたちには、直接伝わって来なくなっているのではないか。恐ろしい音を聞くことはないかもしれないが、神の大きな力を感じることのできない、あまりにも不自然な状態であると思う。

こんな子どもたちに、保育の場では直接自然との関わりを持つときを与えてやらなければならないと考え、あまり大きくない庭は土のままにしてある。風が吹くとほこりが舞い、廊下までざらざらになってしまふ。雨が降るとすぐ水たまりができ、ぬかるみとなる。何度か、小学校々庭のようにきれいにかためてしまったら、といわれたが、教師たちで「これでよい」ということにして

いる。むき出しのその土の庭は、直接自然が子どもたちに訴えるよい場所である。雨が降るとぬかるみができ、水たまりになったとき、子どもたちは水たまりに石を投げ、その波紋を眺めたり、自分の姿や空のうつるのを見て感激している。ぬかるみにわざと入って自転車でそこを通り、そばで他の子どもがしゃがんでじっと、そのタイヤの跡を眺めていたりする。霜柱のたつたときは大変な驚き方で、ハンカチでつつんで室に入り、とけて何もなくなつたときの不思議にびっくりする。いったん土のなかに入つた種の大半は必ず芽を出す。ただし子どもたちがどんなに水をやろりと出て来ない芽もあり、また忘れたところにひょこつと顔を出す芽もあり、千差万別である。

神を知るためには神のなされるふしぎな計画や仕組などを知るために、自然をただ素晴らしい、素適だ！と、情緒的にとらえるばかりでは本当の意味での神に近いという実感はないと思う。私の園では台風が襲来したとき、一度休園しないどころあいを見つて幼稚園に子どもたちを連れて来てもらい、烈しい雨風を園内で体験させたことがあった。大きないちようや松の木その他の植木が風によってゆさゆさとゆれ、子どもたちはガラス戸に鼻をおしつけて庭の風の吹くありさまを物もいわず眺めた。子どもたちは家にいたらこの台風の物凄い威力を感じないですごしてしまつた

と思う。翌朝庭は木の葉で埋めつくされる。このような風の後はずべり台の上や、その他の場所に一ぱいになった落ち葉を子どもたちは掃く。子どもたちは手を使ってでも張り切って落ち葉の掃除をする。

年長組の当番の子どもたちは、四月より責任のある仕事が課せられる。庭の遊具のすべり台のスノコや、タイコ橋の下のスノコなどは相当の重量があるが、友だち同志で協力して並べたり、はめこんだりする。ブランコも、子どもたちでかける。教師は助けることをするが、子どもたち自身が、その物体の性質をじかに感じ、どうしたら下げることができるか、を知らせるようにしている。庭の草木や観用植物への水やり、種を蒔いたところへの水やり、なども、いろいろなやり方を考えて自分でする。しばらくすると小鳥のかごの掃除も始める。糞でよごれた紙の取り替え、水を新しくし餌を替え、菜っぱをいれてやる。自分たちの力で自分の考えでこれらのことを試みているうちに、小鳥の籠の床面積も目で見てすぐどの位の大きさの紙を入れたらよいかがかかるようになる。冬には庭に来る鳥たちに餌をやる。リンゴを包丁で切り、パンくずをまく。

私たちの園にはずっとテレビがない。教師の室にはあるが子どもたちの生活の場には置いていない。神に近く、神の創りたもうた自

然界のすべての仕組のなかに子どもたちをじかに置いてやるためにも、また充実した遊びを中断しないためにも、現代のテレビ番組の程度であつたら、そのための時間を取るのは私たちの園の子どもたちにはもつたない。生の自然の声、生の人の声、生の音楽、そしてさわることのできる身の周りの数々の出来ごと、このようなものを生活のなかにたくさん盛り込みたいと思うときに、私の園の子どもたちにはあまりにもその犠牲が大きすぎる。今の私たちの園の教師陣ののぞみは、この遊びを充実したものにすための質のよい遊具やたくさん素材、を手に入れることである。子どもたちが自分で考えて、自分で物とぶつかって、そこで新しい発見をする、またその物を操りながら、その扱いをより巧みに操れるようになる時が与えられ、またおなじ仲間同志とぶつかりあいながら、下手な仲間作りから上手な仲間づくりを自分たちで創造してゆく、そのような場を持つことによつて、人間の子どものとしての目が開け、心が育つ、と思つている。

都会の子どもたちは、いや、日本全体の子どもたちといつてもよいかもしれない。自然そのもののなかに身を置き、その喜びがどんなに深いものか、がしたいに解らなくなつてきているのではないだろうか？

私の園の子どもたちの問題を考へて、こんな保育を…と毎日やつているうちに、余計な心配までしてしまふようになった。宗教教育といつて神の話はしても、子どもたちが本当に神のなされる業をじかに感じさせるために、私たちは努力をしているのだからか？

手づくりの服を着て、子どもらしい喜びにあふれた笑顔で、雑草のなかでたくましく太陽の光にこたえている東ドイツの子どもたちを羨しがるだけでなく、私たちの園でも、子どもたちが子どもらしい喜びをいっぱい持つて毎日の生活を充実したものにしてやりたい。そしてその生活を通して、神が近くいたまい、守り導いてくださることを知らせ、その愛にこたえる生活を自分も他の人に及ぼすような子どもたちの集団をつくつていきたいと、教師たちは願ひ祈つているのである。

(東洋英和幼稚園)